

## 英語能 雑感

## Thoughts about Noh in English

沖 文郎  
OKI Fumio

---

**Abstract:** I studied at workshop of NOH IN ENGLISH by Professor Munakata. And it made a strong impression on me. It suggested what Noh is, and what Shakespeare is too. So I want to make a paper about it. But I am an electrician, so this paper was made from the viewpoint of a layman. I thought about communication system of Noh and Shakespeare in Noh.

---

**Key words:** MUNAKATA Kuniyoshi, KIKUCHI Zenta, Shakespeare in Noh

宗片邦義、菊地善太、英語能、出口典雄

---

宗片邦義先生の英語能ワークショップに参加する機会を何度か得て、深い感銘を受けました。そしてなぜその様な感銘を受けたのかと云う事を考え、まとめてみたいと思った事がこの文章を上梓するきっかけであります。

私は電機会社で通信設備の開発に従事するエンジニアでした。いわゆる文系の知識はほとんど持ち合わせない、能にもシェークスピアにも無縁な人間です。そこで、この文章は全くの門外漢にして技術屋という異文化の人間に、英語能がどう見えたかという報告であります。特に私の興味は能をコミュニケーション・システムとして考えると云う所にあります。私の居た世界ではコミュニケーションと云う言葉は通信と云う意味でしたので、ここでもそれに近い意味で使っています。この観点から考えた事を何点か報告させていただきます。

英語能から受けた感銘。

英語能というものが在ると聞いた時の私の反応はこうです。

- そんな事が出来るのだろうか
- それにどんな意味があるのだろうか

多分皆さんと一緒にだと思います。しかしワークショップに参加した後の感想はこうです。

- 英語能は確かに能になっている。それも門外漢の私にも分かる程に完成度が高い。
- 英語能は能やシェークスピアの本質を垣間見せてくれる。

そこから能やシェークスピアの本質とは何かと、考え始めました。それが出発点です。

脚本の話。 (クラシックバレエの場合)

先ず、脚本の話から始めます。作曲家の先生とお話ししていましたが、バレエの脚本を書いているところだという事でした。私は思わず聞いてしまいました。「バレエにも脚本が在るのですか、そこには何が書いてあるのですか」

何故かというとはバレエの場合は舞台上にあるのはダンスと音楽（演奏であって歌ではない）のみですから言葉が出てこないのです。脚本には音楽の事もダンスの事も書いてないそうです。音楽の事は作曲家が決め、ダンスの事は振付師が決めるそうです。ダンサーには振付師が口頭で指示するのだそうです。では脚本には何が書いてあるのでしょうか。どうやら、あらすじの様な事が書いてあるようです。

能の脚本。

では能の脚本ではどうでしょうか、殆ど全てが地謡の言葉として記述されます。地謡はストーリーを説明します。情景描写や内面描写もあります。登場人物のセリフもあります。そして謡なので楽譜の機能もあります。音の強弱、音程の高低などが記号で記述されます。更にダンスの内容も記述しています。全ての振りに名前が付いていて、地謡の言葉に対応させて記述されています。ダンスについてこの様に緻密に記録した例は他に無いでしょう。舞台上で行われるパフォーマンスについて全てを規定するドキュメンテーション・システムとして最高の完成度持つシステムではないでしょうか。

能の脚本は小説。

普通、脚本にはセリフとト書きしかないのです。小説には内面描写があります。つまり心の動きが書いてあります。ですから本を読んでいると、主人公の心の中に入り込んで、その物語を疑似体験する事が出来ます。芝居や映画などでは他人が話すところを見て、言葉を聞いてその人の心を解釈するという事になり、現実の生活と同じです。

能は違うのです。小説と同じで内面描写があり、登場人物の心の中に入り込む事ができます。脚本ではなく小説と同じコミュニケーション方式なのではないでしょうか。

脚本にも独白と云う形式の内面描写がありますが、部分的に使われるのみです。

能は仮面劇。

これは先代の金春流家元の言葉です。インタビュー記事の中で印象に残った言葉の一つです。仮面劇は表情による演技を使わないという所に意味があるそうです。

表情筋の中でも口の周りの筋肉は意識的に動かすが、目の周りの筋肉は無意識に動いてしまうのだそうです。そこで人間は目に注目して情報を得ようとするそうです。目を隠すと口に注目し、顔全体を隠されると身体に注目するという事になります。

犬の好きな人に何故犬が好きなかと聞くと、「犬は喜びを全身で表してくれるから」と

いう答えが返って来ました。犬は表情筋が発達していないので身体が先に反応するのでしょうか。

顔を仮面で隠して全身の表現に注目させるという表現形式は非常に効果的ではないでしょうか。

究極の演技はそこにいます。

先代の金春流家元のもう一つの言葉です。能は舞いも謡もスローテンポです。それは映画のスローモーションに似て、今まで見えなかった物が見えてくるという効果があるのではないのでしょうか。動きの意味が、言葉の意味が見えてくるのではないのでしょうか。

そしてスローモーションのその先に静止が有るのです。謡の言葉に乗って仮面で顔を隠し、静止という舞を舞う事が究極の演技なのかもしれません。

能にすればシェークスピアが理解しやすくなるのだろうか。

能が神事であることに着目したいと思います。能の題材は神と人間の関係性であると言えないでしょうか。

「シェークスピア劇は権力や恋に取り憑かれた人々の物語である。」とシェークスピア劇の演出家の出口典雄氏は言っていました。これには神との関係性を含んでいるのではないのでしょうか。そうであればシェークスピアも能と同じかもしれません。しかし喜劇の場合は人間の世界の物語のようで、それらは、もしかすると狂言に近いと言えるのかもしれません。

シェークスピアの魅力は言葉にあると言われています。

饒舌、多弁、流麗な長セリフなどでしょうか。それらは能と真逆のものです。しかしながら、あの言葉「ツービー・オア・ノット・ツビー……」これは饒舌でも多弁でも流麗な長セリフでもありません。シンプルで曖昧で抽象的なものです。これは能の方法論と同じではないでしょうか。ですから着地点は一緒だったのかもしれません。

世阿弥の能はオリジナルの物語ではなく元になる物語があるそうです。

それはオリジナルのストーリーに世阿弥の解釈を加えて能の物語を作ったという事なのでしょう。そうであればシェークスピア劇は能の題材として適しているのではないのでしょうか。この事は夏目漱石も指摘しているそうです。

能は言葉が主である。

これは宗片先生の言葉です。舞いではなく謡の言葉の方が主である。更に言い換えて、形の在るものではなく形の無い言葉が主である。ここまで行けばシェークスピアと一緒に

もしれません。

私見ですが、情報とは言葉なのです。画像は情報ではないと考えています。情報の定義は”ある目的に対して有効な知見”だそうです。知見ですから見聞きした人がいて、その人の解釈が入ります。そして言葉にされたものが知見です。画像の段階ではデータなのです。データを整理して始めて知見になり、更に情報になるのです。

能をコミュニケーション・システムとして考える。

これを言い換えると能を情報伝送方式として考えるという事になります。能では言葉が主ですから謡の形で言葉が、情報が伝送されます。目に見える物、画像は補助なのかもしれません。芝居や映画等では画像が主ですからデータが伝送されます。情報は観客が抽出します。もちろん、セリフも、独白も有りますので、直接的に言語で明示する場面もありますが部分的です。

情報と云うと、何に対する情報かと云う問題があります。能の場合は神事ですから明解です。神様と人間の関係性や世界観などに関する知見が情報として直接的に言語で明示されます。情報密度が高いと言えるでしょう。

結語

ここまでが私の感想です。やはり、門外漢が外から英語能を表面的に見た感想に終始したようです。余りに非常識な事や、余りに常識的な事を書いてしまったのかもしれません。また、これらの事柄は何の検証もされておらず、個人的感想の域を出ていません。ですから、データであって情報になっていない、あるいはそれ以前のもので雑音（ノイズ）にすぎないのかもしれません。それは諸先輩方の判断を仰ぐ事にしたいと思います。

謝辞

拙文の作成にあたっては宗片会長のご指導と菊地事務局長の具体的なアドバイスを頂いた事を記し感謝の意を表します。特に宗片会長にはこの様な未完成の文章の発表をお許し頂きました事に重ねて感謝の意を表します。

(2017年2月受領)